



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	H. G. ガダマー『真理と方法』における存在の遊び：芸術、伝承、言語の呈示的本性をめぐって〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	宮崎, 勝正
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16493号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94895
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Katsumasa_Miyazaki_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 宮崎 勝正

学位論文題名

H.G.ガダマー『真理と方法』における存在の遊び
——芸術、伝承、言語の呈示的本性をめぐって——

・本論文の観点と方法

本論文は、H.G.ガダマーが『真理と方法』において展開する哲学的解釈学の議論全体を、「遊び」(Spiel)という概念に着目することによって、統一的な観点のもとで解釈したものである。「遊び」概念がガダマー解釈学のなかで重要な役割を担っていることは、先行研究のなかでしばしば指摘されているが、その概念の内実と意義についての一般的な合意はなく、「遊び」とガダマー解釈学との関係について詳細な体系的解釈を提示した先行研究は見られない。本研究は、「遊び」の概念が、芸術・伝承・言語といった解釈学的事象をめぐるガダマーの立場を統括する存在論的概念であることを示し、その豊かな含意を具体的に描き出すことを試みている。そこではまず、人間の遊び経験の分析から芸術論までの議論を丹念に検討し、ガダマーの用いる諸概念間の結びつきを吟味した上で、適宜具体的な事例と照らし合わせることを通じて、遊び概念の含む諸側面を包括的かつ整合的に提示している。さらに、芸術論の解釈のもとで得られた「遊び」概念の特徴を、伝承及び言語の本質をめぐる記述のなかにも確認し、『真理と方法』における議論全般を「遊び」概念のもとで整合的に解釈している。こうして本研究は、「呈示」(Darstellung)によって自己を絶えず形成し、保持し、更新するという自己規定的な運動として「遊び」概念を理解し、それが解釈学的事象そのものの本来的な存在様式を表していること、『真理と方法』の議論全体が「遊び」概念のもとで統一的に理解されうることを明らかにしている。

・本論文の内容

本論文は序文と4つの章、および結論からなる。

第一章では、ガダマーによって人間の遊びの経験に与えられている記述を検討し、そこにおいて遊び経験のいかなる特徴が際立たされているのかを考察することで、「遊び」概念への導入を行っている。そこで遊び経験の本質として見出されるのは、「自己呈示 (Selbstdarstellung)」という在り方である。この「自己呈示」という性格をめぐる記述を解釈するなかで明らかになるのは、一つの完結した出来事として自らを現実にもたらしことこそが遊び経験の存在そのものであるというガダマーの見解である。「自己呈示」である人間の遊びにおいては、遊び手が遊びを成り立たせようと努めるという主体的な運動と、遊びの展開そのものが遊び手の意図や狙いを超えて自ずと自己の顛末を具体的に規定していくという遊び自身の自己展開とが、切り離せない仕方で一つの出来事を形作っている。遊びは遊び手を自らのうちに含み込みつつ、そのつど様々な仕方で実現される展開そのものとして存在する。この遊び経験に見出された特徴こそ、ガダマーが解釈学的事象の存在を「遊び」として記述するための第一の立脚点としたものである。

第二章では、人間の遊び経験に見出された特徴を踏まえて、ガダマーが「芸術そのものの遊び」として論じている芸術作品の本来的な存在様式を明らかにしている。『真理と方法』における「遊び」概念は、芸術作品の存在をめぐる議論を経てはじめて、解釈学的経験の本質を示すための包括的な概念へと高められる。本章ではまず、遊び経験から芸術作品の存在論的分析へと論を進めるなかで、ガダマーが芸術作品の自律的な在り方を「呈示」という契機に依拠して描き出していることが示される。芸術作品の「呈示」をめぐる本研究が着目するのは、「全体的媒介」および「理念的統一性」という特徴である。芸術作品は、その時々での偶然的・変動的な要素や、演じ

手ないし鑑賞者の状態の差異を含みながら経験にもたらされるため、そのつど異なった仕方で現われるのであるが、そうした諸現出は同じ一つの作品の経験として、作品そのものと区別されない。この現われと存在の一体性こそ、作品の「呈示」が「全体的媒介」であるということの意味であり、またそれは、作品がその多様な現出と自らの存在を絶えず同化させていく機会として、作品の「理念的統一性」を成り立たせているということである。そしてガダマーは、絶えず自己の存在を増大させながら新たに経験される可能性へと自らを開き方向づけていくという在り方に芸術作品の本質を見出している。こうして本章は、「呈示」に基づく作品の自己規定的な運動こそ、「芸術作品そのものの遊び」ということの内実であると論じている。

第三章では、ここまでで見出された「遊び」概念を基盤として、テキスト理解をめぐるガダマーの議論を精査することによって、ガダマーが「伝承の遊び」として特徴づけている理解の営みの本質を明らかにする。ここでの狙いは、テキスト理解に関する記述のなかに再び「呈示」の性格を見て取ることによって、ガダマーの理解論を「遊び」概念から把握することである。何かを理解するという人間の基本的な営みは伝承への参与として捉えられる。ガダマーにとって中心的な関心となるのは、過去から受け継がれてきたテキストを読んで理解するという事態である。その際、テキスト理解は、「適用 (Anwendung)」と「解釈 (Auslegung)」という二つの契機から捉えられる。適用とは、その時々を理解者が、自身の先入見を一時宙づりにすることを通じて、自らの立場をも含めて、テキストで言い表されている意味内容を現出させることである。そうした意味の現出は常に一つの解釈であり、理解された内容が概念的な枠組みのもとで有限な仕方では立ち現われることを意味している。こうして、適用と解釈は、テキスト理解の過程そのものと一体であると考えられる。テキスト理解もまた「呈示」による自己規定の運動、すなわち「遊び」として解釈できる。理解の営みは、そのつどの理解者の立場や状況を含みつつ、具体的な表現のもとで伝承を現実にもたらすことによって、理解された事柄を絶えず後世へ受け継ぎ、その理解の可能性を自ら方向づけていくという在り方をしているのである。

第四章では、第三章での議論を、解釈の言語性という観点からさらに掘り下げている。テキスト理解に見出された「呈示」は言語の本質でもあると考えられ、したがって、ガダマーが「言語の遊び」と呼んでいる言語の存在様式は、ここでもまた言語そのものの呈示的性格に依拠することによって適切に把握することができる。ガダマーは、理解の過程における解釈一般の形式が言語性に基づくものであるとしている。そこで、言語を世界そのものの呈示として論じるガダマーの記述について、芸術論および理解論との関連性と整合性に依拠しつつ検討し、言語そのものが呈示的な自己規定という本性を持つものとして、何かを理解するという基本的な人間的営みの基礎であるというガダマーの見解を明確化する。そして、言語使用は、人間の先入見を形作っている概念的な枠組みが自らを絶えず規定し拡張していく運動であり、したがって、言語的に媒介される世界そのものが自己を形成し、保持し、更新していく過程であると論じる。

以上から、『真理と方法』における「遊び」概念が、解釈学的事象の本来的な存在様式として、呈示的本性による自己規定の運動を一貫して指し示すものであり、芸術、伝承、言語をめぐる『真理と方法』の議論全体を統括する概念であると結論づけている。